

第8回「日本語大賞」

テーマ「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

寄り添う言葉

鳥取県
鳥取県立境高等学校
3年 本岡 歩実

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「大丈夫」この一言だけを残して笑顔で手術室に向かった母の姿はもう見えない。家族で待つ病室は怖いくらい静かだった。

母が何日も入院している間、小学生だった私はすごく寂しかった。父は単身赴任中で週末にしか帰って来なかったからだ。母のいない家はがらんとして小さな物音も耳についた。私は母に会いたくて学校の帰りも毎日のように母のいる病院に通った。手術当日、私は学校を休んで朝からずっと母の側にいた。隣の母は不安な顔一つ見せず、私達家族を気遣い明るく接してくれていた。母は卵巣に腫瘍ができる『卵巣のう腫』という病気で開腹手術をするこ
とになったのだった。母を手術室へ見送った後、心配からか誰も会話を切り出せずにいた。何時間経っても手術室から出てこない母に、家族の心配は更に募っていった。のう種のみを切除する予定だったが、開腹したところ腫瘍が大きくなっていて卵巣も半分切除することになった。その話を家族で聞いた時、学校の授業で赤ちゃんのことを勉強したばかりの私は、その手術が母にとってどんなに大きな事だったのか、幼いながらに理解した。今、手術室にいる母はその事実を知らない。その事実を知った時、母はどんな気持ちになるのか。大人じやない私が母の立場になり、その気持ちを考えることはとても難しかった。数時間後、私達の前に現れた母は全身麻酔のせいか意識が朦朧としていた。その姿を見た時、私は何も言葉をかけられなかった。母の意識がすっかり戻った後、医師が手術の内容を伝えた。疲れた母を気遣いその日は早く家に帰ることになった。母が手術室から戻ってから何も喋ることのできなかった自分の無力さを感じた。病室を出て歩く私は母を元気づける言葉を探し続けた。エレベーターに乗る瞬間私は思いついた。すぐさま私は病室へ引き返した。早く母を元気づけたい、その一心で私はただ走っていた。母の病室が見えた。母の姿が見えた。母は走ってくる私に気付き驚いていた。「お母さん、大丈夫！」私は全力でこの言葉を母に送った。「大丈夫」という言葉で少しは母に勇気を与えられるかもしれない。私が母に寄り添い支える、という気持ちを込めてこの言葉を送りたいかった。無責任だと思われるかもしれないが「頑張れ」よりは一人じゃないと思えるような気がした。母は私の気持ちを受け止めるように私の頭を優しくなでてくれた。その時の母の顔は涙と笑顔であふれていた。その表情を見て私も笑顔になった。

私はその時のことを忘れない。今でも「大丈夫」という言葉を大切にしている。この言葉は生活の中で何度も耳にする。例えば怪我や病気をした相手に言う時、部活でミスした相手に言う時、緊張する場面で相手や自分に言い聞かせる時などだ。相手を元気づけたり、勇気を与えたり、安心を得たり、この一言だけでもすごいパワーのある言葉だ。私も何度もこの言葉に救われた。だからこそ私はこの言葉を人に言っただけたり、自分にも辛いことがあれば言いきかせている。

今、私の祖母はある難病を患っている。入院生活が長かったのと飲んでる薬の副作用で少し物忘れの症状もある。家にいる時など今いる場所が分からなくなったり、日付や朝昼晩などの時間が分からなかったりする。時には、私が誰かも忘れてしまうほどだ。祖母は何かを忘れる度に「もうさっきのことも分からんわ…。」と悲しそうに言う。そんな時に、「大丈

夫。おばあちゃんがまた忘れても私や家族が教えてあげるけんね。」と言うと、祖母は笑顔になつてくれる。時々、忘れることの悲しさや悔しさで涙を流す姿を見ると、自分が言ったこの言葉の無責任さを感じてしまう。でも、祖母が優しく強い心を持っていることを私は知っているし、そんな祖母が大好きだ。だからこそ、寄り添い支えるという気持ちを込めて今もこの言葉を送り続けている。私の気持ちが届いていると信じて。